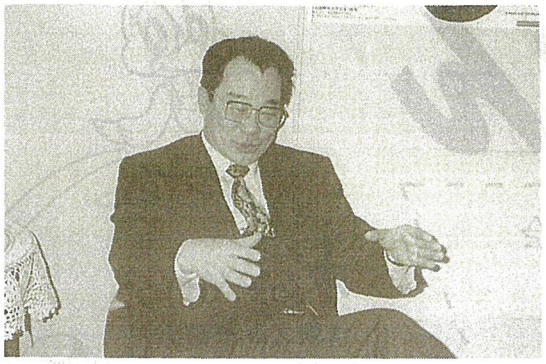
この人と30分

ぶらり訪問⑤

果敢にチャレンジしてほしいですね。

(財)静岡県科学技術振興財団
常務理事　金澤（かなざわ）　宏（ひろし）　氏



■プロフィール

昭和八年、大阪市生まれ・昭和三〇年京都府立大学農学部卒業後、京都大学研究員、広島県工芸試験場研究員、静岡県工業試験場研究員、静岡県浜松繊維工業試験場長、静岡県工業技術センター所長を経て、平成三年から現職・「産業界の力に、お役に立ちたいと、常に研究の成果が企業の成果にどうつながっていくかを考えてきた」とはご本人の言・ゴルフと寺院めぐりが趣味・血液型O。

訪問インタビュー第五回は、昨年六月発足した静岡県科学技術振興財団金澤常務理事。ご多忙の三月中旬、中小製造業の技術開発の重要性を熱っぽく語っていただいた。

Q．財団設立の目的は？

近年のめざましい科学技術進展に対し、県内産業の活力ある育成、振興をはかるため、①中小企業者の研究開発支援強化、②高度技術の研究開発、③研究開発の成果普及、④創造性豊かな人材の育成を進めてゆきます。

Q．「科学技術振興」では敷居が高い？

中小企業の皆様にとって、財団の名称は確かに縁遠く感ずるかもしれませんね。しかし、現実には基本財産、事業基金運用益の相当額が中小企業の研究開発助成に振り向けられ、意欲ある方は大歓迎の体制なんですよ。

事実、これまでに木製バリケード、木レンガ、ヒノキ壁材、住宅用プレカットライン加工装置など数多くの木材関連企業が、時代に即したテーマで中小企業研究開発事業に取り組んでいますから。

また、専任技術者の手薄な企業には、工業技術センター等の研究機関が共同研究でこれをバックアップすることも可能ですし、財団は両者のコーディネーター役も務めます。

Q．研究開発の注意点は？

工業技術センター時代を振り返ると、企業の大小を問わず、伸びる企業は絶えず訪問してきましたね。「何かありませんか」の相談が一番困る。ごく些細な性能試験でも、とにかく「タネ」をもって相談にくる。そこから話題も広がるし、人間関係ができ様々な分野に発展してゆくものです。

工業技術センターはもとより、本県には地域に開かれた静岡大学の先生方もおられる。これを利用しないのは、業界、企業側の責任ですよ(笑)。

Q．最後に木材業界に向けてひとこと。

木偏産業の皆様とのお付き合いの中で感じるのは、企業の方々が自分で負い目を背負っている感じがします。セラミックスなどの新素材、ハイテク産業に比べ、ワンステージ低いと考えている方が多いのではないでしょうか。

そうではなく、環境問題を考えても、リサイクルのきく資源として、また、居住性を考えても木造住宅が一番良いことは明らかで、クリーンイメージをもった産業だと考えています。最近の様々な他業界からの参入を見ても、木材産業がいかに大きな可能性を残しているかが理解できます。ただ、保温・調湿機能など木材自身の持つ、素晴らしい素材特性のみに頼った商売でなく、今後は豊かな資源と消費者を技術開発でつなげる業界努力が強く求められているのではないでしょうか。

会員の皆様が今後共、木材産業の担い手であり続けるためにも、真剣に、果敢に技術開発を進めてほしいと思います。

（文責　編集室）